

## 四十余年の辻棲合わせ

揖斐, 高

<https://doi.org/10.15017/4742064>

---

出版情報 : 雅俗. 16, pp.151-155, 2017-07-20. 雅俗の会  
バージョン :  
権利関係 :



# 四十余年の辻褃合わせ

掛斐 高

## ●プロフィール

●生年月日 一九四六年九月十八日

●卒論題目 「時代物浄瑠璃の表現と本質  
附論・広末保論の素描」

●デビュー論文 「江湖詩社と遊里詞―  
江戸詩壇の革新をめぐって―」上・下

（『国語と国文学』一九七四年三月・五月）

●思い出の研究書 尾形仿著『松尾芭蕉』  
（日本詩人選17、昭和四十六年刊、筑摩書房）

芭蕉の発句四十一句を一般読者向けに注釈・鑑賞したものであるが、なかでも「しづるや田のあらかぶの黒むほど」の注釈と鑑賞に痺れた。詩的感性と学問研究とはどう結びつくのか。そのあるべき姿を見たような気がした。

●研究以外の趣味 特になし。最近ではテレビのニュース、ワイドショー、バラエティなどを見ることが多くなった。テレビを通して世間の動きをウォッチングするのが趣味といえは趣味かもしれない。

このような回想的な文章を依頼される年齢になってしまったのかという感慨は拭えないが、日本文学のいわゆる研究に関わってきた期間が四十年以上にもなれば、その長さだけなら有資格者ということになるのかもしれない。しかし、回想に値するような履歴が自分にあるのかと自問してみれば、それははなはだ心許ない。とりあえずは、自分のささやかな研究生生活の辻褃合わせを試みる機会を与えられたものと考えて、この一文を寄稿させていただくことにする。

昭和四十一年（一九六六）に大学に入学した私にとって、研究との関わりにおいてもっとも大きな出来事は、昭和四十三年（一九六八）を前後して数年のあいだ続いた、いわゆる大学紛争である。こんなことを書き始めると、私が大学紛争なるものをきっかけにしてアカデミックな学問に疑問を懐くようにな

り、あるべき学問というものに目覚めて今日に至ったというような、ありがちな展開を予想される方もおられるかもしれないが、私と大学紛争との関係はそんな恰好の良いものではなかった。

思い起こせば、確かにアカデミズム批判は大学紛争のテーマの一つだった。既成の体制的なものに対する反撥は、当時の若者にとっては生理的な反応として遍在しており、私自身の中にも気分的なものとしては十分に存在したが、しかし、大学での国文学研究というもののが果してアカデミズムなのかということとは漠然として捉えどころのない問題だった。先ごろ廃刊になった雑誌『文学』が、昭和四十四年八月号に「われわれの学問」と題する座談会を掲載した。大学に所属する気鋭の国文学研究者五、六名が出席した座談会で、国文学研究におけるアカデミズムとは何

かということが話題になっていたように記憶する。しかし、それを読んだ後でも結局、アカデミズムとは何なのか、そしてそのようなものが国文学研究にあるのかどうかということとはよく分からなかった。紛争当時、国文学研究のアカデミズムを批判した学生・院生の側も、批判された先生方も、ともによく分からないまま批判し、批判されていたのではないかと思う。政治が先行した時代だった。

やや先走ってしまったので、少しばかり話を巻き戻すことにする。私は九州の地方都市の高校を卒業し、そのままそこで一年間の浪人生活を経たのち、昭和四十一年に上京して大学に入学した。受験勉強の反動だったのだろうか、当時流行していた加山雄三の歌に影響されて「湘南の明るい海」と「輝く青春」に幻惑され、それに少しばかりは身体も鍛えたいと思って、大学に入学するとすぐヨット部に入部した。しかし、これは身の程を弁えない甘い浅はかな判断だった。ヨット部は思った以上に大変なところだった。毎週、木・金・土・日の四日間、湘南江島での合宿に参加するのが義務だった。古い漁師の家をそのまま転用したオンボロの合宿所での炊事

当番、朝夕のヨットの海からの上げ下ろし、さまざまな体力トレーニング、ロープの結び方や手旗信号の練習などなど苛酷な合宿生活が続き、合宿所から東京に戻った月・火・水の三日間も、塩水でベトベトになった大量の衣服の洗濯に追われ、合宿中の疲労のためボンヤリと横になっていることが多かった。合宿所では夜の自由時間に気晴らしのため週刊誌を手にとってみても、眺めるのはグラビア写真ばかりで、記事は読めなかった。あまりに疲労困憊すると文字を読む気力さえ失せてしまうということを、この時はじめて経験した。結局苛酷さに耐えきれず、一年生の夏休み明けに退部した。ヨット部に所属したのは半年に満たない期間だったが、その半年弱の間に私の胸囲は十センチ以上も増えていた。大学構内の古びた学生寮が私の東京での住まいだった。ヨット部を退部した後は、徒歩三分の教室に真面目に通えば良いようなものだが、そうはならなかった。第二外国語としてフランス語を履修したが、ヨット部の生活ではその授業に出ることもままならなかったため、初歩的な知識が身についておらず、退部後、秋の学期から授業に顔を出してもつい

で行けなかった。フランス語の授業だけでなく、自然と教室には足が向かわなくなり、学生寮の相部屋で取り立てて何をするというわけでもなく、昼夜逆転した自堕落な生活を送ることになってしまった。今思えば惜しいことだが、寺田透先生のフランス語講読の授業も、外山滋比古先生の英語講読の授業も、数回出席ただけで後は出なくなった。今に較べて、当時この手の学生は珍しくなく、私が住んでいた学生寮にも同類の三年寝太郎風の学生は多くいた。当時の大学はこうした寝太郎学生に対して寛大だった。出席不良でも試験を受けて、見当違いであっても答案用紙をそれなりに埋めておけば、成績は最低ながら多くの科目で単位を頂戴できた。私が在学した大学は、二年間の教養課程での成績によって、三年次からの専門課程の所属学科が決まるという仕組みだったが、教養課程の成績が底辺十パーセント以内だった私の進学できる学科は限られていた。おのずから成績に関係無く受け入れてもらえた文学部国文学科に進学することになった。

昭和四十三年四月に国文学科に進学するやいなや、大学紛争が激化し、疾風怒濤の日々

になった。授業は開かれなくなり、研究室は封鎖され、渦巻く学生運動の流れのなかで右往左往するようになった私は、おかげで何をするわけでもなかった自堕落な生活から脱け出すことができたが、とりたてて勉学意欲に目覚めたというわけではなかった。あたふたとしているうちに大学紛争は収束に向い、専門的な学問に触れる機会もあまりないまま卒業ということになった。一年余りの留年期間を含めて、変則的に昭和四十六年六月に国文学科を卒業し、また変則的に翌七月に国文学専攻の大学院に進学した。大学紛争がなければ自堕落な生活に埋没したまま、専門科目の授業に耐えられず、おそらく私は大学を中退していたのかもしれない。仮に何とか大学を卒業できたとしても、大学院への進学などありえなかっただろう。大学紛争の後始末のなかで、教授会が大学を常態に戻すために已むなく行なった、異例の寛容な学生救済策の恩恵を私は蒙ったのである。そういう意味で、私にとって大学紛争は大きな出来事だった。私は乱世であつたが故に生き延びたのである。

た。私が提出した卒業論文の題目は「時代物浄瑠璃の表現と本質 附論 広末保論の素描」というものである。当時、私は広末保の著作のファンで、広末保の『元禄文学研究』（昭和三十年）・『近松序説』（昭和三十八年）から『もう一つの日本美』（昭和四十年）・『悪場所の発想』（昭和四十五年）へという、近代主義から反近代主義への移行の足取りに興味を惹かれていた。しかし、広末保を論じても卒業論文としては受け入れてもらえないだろうと思つたので、それは附論に回し、古典文学大系の『近松浄瑠璃集 下』を慌てて通読して、近松の時代物浄瑠璃についての幼稚な感想をつなぎ合わせたものを主論として提出した。この卒業論文は今も手元にあるが、未だに読み返す勇気の持てない恥ずかしい代物である。しかし、これで卒業が認められ、大学院への進学が許されたのは、当時国文学科には近世専攻の先生が不在だったという偶然が幸いしているのではないかと思う。私の指導教授は中世文学の市古貞次先生だったが、市古先生は学生のやりたいことをやりたいようにさせてやろうという寛容の精神で接してくださつた。この放し飼いの方針もまた私の

ような人間には幸いした。

近松で卒業論文を書いたものの、近松の作品そのものに魅せられていたわけではないので、大学院に進学したからといって、そのまま近松を研究しようという気持にはならなかった。そもそも、私にとって大学院進学は研究意欲があつてのものではなかった。就職先もなく、就職して社会人になりたいという意欲にも乏しかった私は、とりあえず大学院を人生の方向を決めるまでのモラトリアムの場所として利用するつもりだった。しかし、そうした宙ぶらりんの大学院生活が始まつてすぐに転機が訪れた。研究室の書架にあつた富士川英郎『江戸後期の詩人たち』（昭和四十一年）および当時刊行中だった『森銚三著作集』（昭和四十五年～四十七年）に出会つたことが、私を研究に向かわせる転機になった。これについては、すでに平凡社東洋文庫版の『江戸後期の詩人たち』（平成二十四年）の解説などで触れたことがあるので、ここでは省略する。

大学院に進学して一年半後に、私は修士論文として「柏木如亭論——近世文人の詩と生涯」を書いた。しかし、これが果して研究と

して通用するものなのかどうか、研究を続けていくだけの能力が自分にあるのかどうか、私には自信が無かった。その頃、柏木如亭の伝記資料の有無についての質問の手紙を森銑三翁に差し上げたことが機縁になって、東京

タワー下の三康図書館の一室で開かれていた、森翁主宰の三古会という談話会に私は出席させていただいていた。月一回開かれていた三古会には、森翁のほか、丸山季夫・向井信夫・谷沢尚一・木村嘉次・杉村英治・北川博邦などその道の諸先学たちが出席されており、江戸・明治の歴史・文化・学問・文学・芸術・芸能についてさまざまな歓談が交わされていた。私にとっては初めて耳にするような話ばかりで、とても話に加わるなどということではできず、ただひたすら耳を傾けて、話の内容を理解しようと努めていた。そうしたことで森翁にはすでに面識があり、森翁の近世人物研究に傾倒するようになっていたので、書き上げた修士論文の原稿を大学院に提出する前に森翁に読んでいただこうと思っていた。心中ひそかに、森翁から読後の感想をいただき、それによって自分に研究を続けていく能力があるのかどうかを自己判断し、適

性が無いようなら大学院博士課程への進学はやめようと考えたのである。その頃の森翁の年齢に近づいた今となってみれば、森翁にとつては甚だ迷惑な、まことに厚かましいお願いだったと思う。

その後一週間ほどの間に、森翁からは修士論文の原稿についての短い感想を書き記した葉書を二度ほど頂戴し、読み終えた原稿を返却するから自宅に受け取りに来るように、ついでには素餐を用意しておくからというような連絡をいただいた。私は指定された午後の遅い時間に、緊張しながら、反町弘文荘の持ち家を借りて住まれていた湘南藤沢のお宅を訪ねた。修士論文原稿に対する森翁の評価はおおむね好意的なものだったので、ほっとした憶えがある。その時、劳いのお気持ちから出してくださった食事は、おそらく森翁にとつては日常的なものだったのだと思うが、豆ご飯とすまし汁と漬物という質素なものだった。森翁が鶴のような瘦躯である理由の一半が了解できた気がした。小さなちゃぶ台を間に挿んで森翁と向かい合って畏りながら食事を頂いた。森翁はグリーンピースがあまり好きではなかったのか、豆ご飯のよそわれた茶

碗から、グリーンピースを一つ一つ撥ね出して食べておられたのが、強く印象に残っている。森翁の好意的な評価に後押しされて私は修士論文を提出し、大学院の博士課程に進学した。

それから現在に至るまでの四十余年に及ぶ研究生活を振り返るとすれば、私にとつて研究は果して学問だったのかという問いを避けることができないように思う。私が大学紛争によって自堕落な寝太郎生活から脱け出ることができたのはすでに記したが、一朝一夕のうちに私の寝太郎根性を変えることは難しかった。研究生活の出発点において、現実の社会や組織あるいは制度というものに対する不適合の意識、そしてそうした自意識から生じる屈託というものを抱えていた私は、研究というものに現実と距離を置くことのできる隠逸の場を期待した。かつて服部南郭が「寐隠弁」を書いて眠りの時間を煩わしい世俗から逃れる隠逸の場とし、また陸軍軍医総監・医務局長として俗務に尽瘁していた森鷗外が「コンタンポラン」（『浜江抽斎』）を求めて近世後期の考証家の史伝を試みることに慰藉を見出したように、そして戦時下の社会的風潮

に抑圧を感じた石川淳が「江戸へ留学」(「乱世雑談」)して韜晦しようとしたように、私もまた俗世間とは異なる居場所を得るために近世文学研究の世界に入り、そこに隠れ逸れたと思ったのである。

そうした研究に対する退行的な姿勢が、私の研究を規定してきた。現代とは異なる近世という時代のなかに、私の「コンタンポラン」(同時代人)、森銑三翁が愛用した言葉を用いれば「なつかしき人」を見出し、その生き方や著作に共感し、それを現代に再現し顕彰すること、それが私の研究の基本になった。そのようにして始まった私の研究は、先行研究を踏まえ、そこに何かを付け加えて後世に伝えるというような、つまり「私」という存在を消去しても何かが残るような、学問的な継続性を敢えて求めようとはしなかった。そもそも文学研究の出発点には研究対象に対する鑑賞や共感という個人的な情意が深く関与しているはずであり、それを言葉にして表現できれば、それでよいのではないかとさえ思った。もちろん、近年声高に言われるようになった、日本文学研究のグローバル化や社会貢献などという社会との接点を積極的に求め

ることは、それが日本文学研究が学問として存続して行くために必要であることは理解しているが、私の研究に関わる動機がそういう社会的な問題意識と乖離するものであったこともまた事実だった。

私は小説を書いたことはないが、私的な情意から研究に関わろうとしていた私にとって、研究論文を書くという行為は、客観性や事実性をどこまで尊重するのか、想像力の範囲をどこまで許容するのかというような点において異なるところはあるが、動機においては小説を書くことに近かったのではないかという気がする。研究論文を書いてきたその時々私の情意は、時期や研究対象によって表われ方に濃淡の差はあるものの、直接的に、あるいは間接的に、そして時には逆説的に、研究論文に托され反映されてきたように思う。

取りあえずは以上が、私の四十余年の研究生活の出発点についての辻褃合わせである。もちろん記したことは事実である。しかし、果してこの文章が真実を表わすものになっているのかどうか。すべては辻褃合わせのために、現在の私を合理的に解釈するために、事

実を選択し都合よくつなぎ合わせた「物語」に過ぎないのではないかと言われれば、そういう気もしないではないが、それが回想記や自伝というものの宿命なのだから致し方ない。